

指導資料



鹿児島県総合教育センター

特別支援教育 第129号

- 幼, 小, 中, 盲・聾・養護学校対象 -

平成15年7月発行

日常的な活動を通じた発音指導の進め方

一般に発音指導という場合、聾学校や難聴・言語通級指導教室，その他関連施設における専門性の強い指導を思い浮かべがちである。しかしながら，正しい発音につながる基礎的な内容については，日常の活動の中で発音指導を進めることができるものも多い。

子どもは，日常会話における発音が改善され，より明瞭な発音ができるようになれば，伝える喜び，伝わる喜びを味わうことができる。さらに，その喜びが話す意欲にもつながり，コミュニケーションが質的にも量的にも拡大していくことが予想される。

そこで本稿では，担任や保護者が遊びや日常的な活動を通して取り組むことができる発音指導の進め方について，実態の把握の仕方や具体的な指導事例を述べる。(図1参照)

1 発音に関する実態の把握

発音指導を始める前に，以下に示すような視点から子どもの発音の状態や不明瞭になる原因を的確に把握し，取り組むべき課題を明らかにすることが大切である。

(1) 発音の状態

発音が全体的に不明瞭なのか，部分的に不明瞭なのか，部分的であればどの音とどの音が不明瞭なのかを明らかにするようにする。

正しい発音ができるようになる時期については表1を

表1 構音発達の日安

2歳代	母音 ワン パ行音 バ行音 マ行音 ナ行音
3歳代	タ行音 ダ行音 ヤ行音
4歳代	カ行音 ガ行音 ハ行音 パ行音 ン行音
5歳代	サ行音 ザ行音 ラ行音

目安にする。加我牧子編「小児のことばの障害」から引用

(2) 構音器官の状態

構音器官(図2参照)の形態に異常はないか，指示どおりに舌を出し入れしたり，口蓋や歯茎を舌でなめたりできるかを調べる。また，頬をふくらませたり，うがいをしたりできるか，唇をとがらせることができるか，食べ物をスムーズに飲み込むことができるかといった器官同士の協調動作の状態も確認する。構音器官の

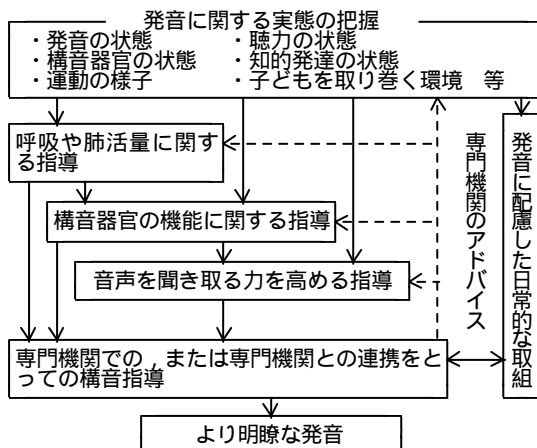


図1 発音指導の進め方の手順

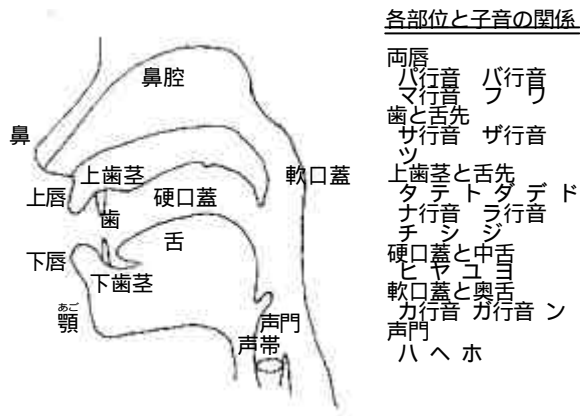


図2 主な構音器官と子音の関係

異常については、耳鼻咽喉科等による正確な診断が必要となる。

(3) 運動の様子

粗大運動や微細運動にぎこちなさは見られないか、全身運動の際の呼吸の様子はどうか等を観察する。また、日常生活において鼻呼吸ができていないか、一定時間息を止めることができるか等も把握する。

(4) 聴力の状態

日常における聞こえの様子を観察する。少しでも聞き取りにくい様子が見られたら、耳鼻咽喉科等での聴力検査を実施し、治療を受けるようにする。

(5) 知的発達の状態

発達検査等を実施し、同年代の子どもと比べ、知的発達に遅れはみられないか等を調べる。

(6) 子どもを取り巻く環境

子どもが不明瞭な発音をしたときに、言い直しをさせたり、まねをしたりしてはいないか等、周囲の対応を把握する。

以上の視点から実態を把握するが、構音器官や呼吸の状態等については、専門機関のアドバイスを受ける必要がある。また、次に述

べるような指導を実際に行いながら、実態把握を進めていくことが望ましい。

2 呼吸や肺活量に関する指導

発音に関する実態把握の結果、呼吸数が多かったり、肺活量が少なかったりした場合は、次のような改善のための工夫に取り組む必要がある。

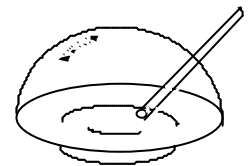
呼吸は、発音の最も基本となるものである。肺から出てきた空気が声帯を震わせ、語音の元になる音をつくる。従って、安定して言葉を話すためには5～10秒程度続けて息を吐き続ける力が必要である。そのためには、全身運動を伴う遊びを多く取り入れて、安定した呼吸ができるようにすることが大切である。

(1) シャボン玉遊び

ア 専用のシャボン玉液で小さい玉をできるだけたくさん作ったり、大きい一つの玉を作ったりして呼気の調節力を高めるようにする。

イ 図3のように皿

にシャボン玉液を入れ、ストローでゆっくり吹いて大



きなシャボン玉のドームを作る。1

回の呼吸でできる大きさを競ったり、鼻で呼吸しながらストローから口を離さず、大きいドームを作ったりする。

(2) ろうそく吹き

5本のろうそくを並べて立て、強く吹いて一度に吹き消したり、弱く吹いて続けて長くゆらゆら揺らしたりして、呼気

の強弱をコントロールできるようにする。

(3) おもちゃ等を使った遊び

風船（固くて難しい場合はストロー付きの毛笛を使用），吹き戻し，玉吹き上げ，紙風船，風車等が利用できる。

子どもによっては，口からしか息を吐けなかったり，鼻からしか吸えなかったりする場合があるが，息を使うおもちゃの活用を通じて肺活量が高まり，発音においても自然な改善が期待できる。

3 構音器官の機能に関する指導

子どもの実態から構音器官の動きや器官同士の協調動作に問題が認められた場合は，以下のような遊びを通して構音器官の機能を高めるようにする。

(1) 舌の機能に関する遊び

ア 鏡を見ながら，大人につかまれないように舌を出したり引っ込めたりする。その際，舌の動きを視覚的に確認し，動きをイメージできるようにする。

イ 平たい皿に塗ったジャムをなめ，舌を平たくする。

ウ 口の周りや硬口蓋に 5mm 四方の正方形に切った焼き海苔^{のり}を付け，舌だけで取り，舌の柔軟性を高める。

エ 舌の上にゼリーや角切りのようかんを乗せ，舌と硬口蓋でつぶし，舌の筋力を高めたり，構音器官の場所を確認したりする。

(2) 発音器官全体の機能に関する遊び

ア 鏡を見ながら口の形のまねやにらめっこ等をして，唇や顎^{あご}の柔軟性を高める。

イ 口の中に水を含み，そのまま 10 秒ほどためた後，ピューッと勢いよく遠くに飛ばす。水を含む場所と飛ばす場所を離すなどして鼻呼吸を誘導したり構音器官の協調動作を高めたりする。

4 音声を聞き取る力を高める指導

構音器官で作られ，発せられた音が正確であったかどうかは，自分の耳で聞いて判断する。これを音声フィードバックという。呼吸や構音器官に問題がみられない場合は，音声フィードバックに問題がある場合が多いため，音声の聞き取りを意識した活動を取り入れる必要がある。

(1) 傾聴意欲を高める遊び

通常のいす取りゲームは曲が止まったら座るというルールだが，曲が流れている間は座るというルールに変える。また，曲に限らず，いろいろな音の高さが出る楽器を用いたり，物語の朗読等による音声を用いたりする。

(2) 子音を聞き取る力を高める遊び

大人が絵カードの名称を読み，子どもが絵カードを取るゲーム形式の遊びをする。最初は音節数の違う絵カードから始め，徐々に音節数の同じ絵カード，母音が同じ絵カード，一部の子音だけが違う絵カード

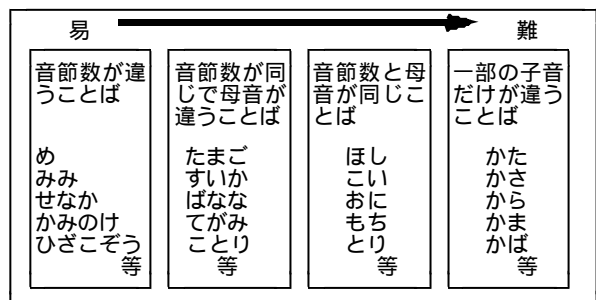


図 4 絵カードに使うことばの例

だけが違う絵カードというように難易度を上げて読むようにする。(図4参照)

(3) 自分の音声に気付く遊び

「ブーブー」「ガーガー」と言いながら、ぶたやあひる等の動物の模倣遊びをする。さらに自分の音声に気付かせたい場合は、その場面をビデオで撮影しておき、すぐに見返すようにする。音声のフィードバックに加えて、模倣の動きも視覚的に確認できるため、効果が更に期待できる。

(4) 特定の音だけを聞き分ける遊び

手拍子をとりながら歌を歌い、特定の音の部分だけ手を打つのをやめたり違う動きをしたりする(例:「むすんでひらいて」の「て」の部分だけ)。

本項で述べた内容については、楽しい雰囲気の中で子どもの負担にならないように配慮すべきである。また、聴覚に障害がある場合は、自己音声、他者音声共に聞き取りが困難になる。その場合は聴覚だけに頼らず、音声による振動や音に反応する機器の利用等、触覚的・視覚的なフィードバックも併用する必要がある。

5 発音に配慮した日常的な取組例

正しい発音を育てる場面は、限られた時間、場所で行う特別な指導だけでは不十分である。これまで述べてきた指導に加え、家庭や学校において日常的に実践することや、十分な環境の調整を行うことが必要である。表2はその実践例である。

表2 指導事例

子どもの実態	小1(指導開始時)	
	<ul style="list-style-type: none"> 発音は単音ではほぼ明瞭であるが、単語になると子音の省略が目立ち、会話が全体的に不明瞭になりやすい。 構音器官や聴力には異常は認められない。 声小さく、少し話すと呼吸の回数が増える。 就学前は家庭保育で、激しい運動の経験が少ない。 保護者や祖父母から、「もっと大きな声で」「ゆっくりはっきり」等、話し方についての注意を常時受けている。友達から指摘を受けることもある。 	
実態分析	<ul style="list-style-type: none"> 声小さいことや呼吸数の多さから肺活量に問題があると考えられる。また、周囲からの指摘によって自分の話し方を気にしている傾向がある。一部の構音に誤りがあるのは、自分の声小さいことや発音を気にして無口になり、音声フィードバックが十分にされなかったためであると予想される。 	
	学校での指導	家庭での指導・配慮
一年次の内容と結果	言語通級指導 <ul style="list-style-type: none"> 息吹き遊び シャボン玉ドーム ろくそく吹き 等 学級での指導 <ul style="list-style-type: none"> 級友の理解 外遊びの場面の設定 (結果) 息を吐く時間を徐々にコントロールできるようになってきた。	<ul style="list-style-type: none"> 本人の話し方に関する指示や注意を一切しないようにする。 正しい発音で、抑揚を付けて表情豊かに話し掛けるようにする。 (結果) 学年の後半から学校での出来事をよく話すようになった。
	二年次の内容と結果	言語通級指導 <ul style="list-style-type: none"> 息吹き遊びの継続 聞き取り遊び 学級での指導 運動を目的とした業間時間帯の設定 毎月、手作りカルタによるカルタ会の実施 (結果) 肺活量は改善された。会話の明瞭度が向上してきた。
三年次の内容と結果	言語通級指導 <ul style="list-style-type: none"> 聞き取り遊び 構音指導 学級での指導 本人の希望による号令係 運動の業間時間の継続 (結果) 級友との積極的なかわりが見られる。構音が改善したため、通級指導を終了した。	<ul style="list-style-type: none"> これまでの指導・配慮を継続する。加えて、積極的に外で遊ぶように促す。 (結果) 家庭における会話の声が大きくなり、電話を積極的に受けるようになった。周囲が認めるほど発音が明瞭になった。

「サ」音、「キ」音等の単音の構音指導に関しては、専門機関との連携が必要不可欠である。必要に応じてアドバイスを受けながら、指導を進めていくことが望ましい。

〔参考文献〕

柳生 浩 『絵を見て教える、やさしい発音・発語指導(上)』

2001 湘南出版社

(特殊教育研修室)